J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 17, No. 1 (2012) 57～78

日 本 人 英 語

― 英語発音の実態とその矯正法 ―

小　野　浩　司

English Pronunciation by the Japanese and the Ways to Correct it

Koji Ono

要　　旨

本論は日本人が英語を発音するときに現れるさまざまな特徴（これを日本人英語と呼ぶ）を音韻のレベルに則して明らかにしたものである。具体的には、分節音、音節、語、句、文のそれぞれのレベルでの日本人英語の特徴を列挙した。このようにレベル別に日本人英語を議論したのは、これまで「音韻のレベル」という観点から日本人英語が議論されなかったからであり、また、かりにあるレベルに集中して日本人英語が現れていることがわかれば、その矯正方法も自ずと明らかになるからである。議論の結論、日本人英語はどのレベルにも万遍なく現れるが、なかでも分節音のレベルでの発音に問題が多く見られることがわかった。このことは、英語を習いたての頃にしっかりした母音・子音の発音練習が行われなかったことを意味し、あとあとまで「通じない英語」を話す大きな要因となっている。この点で、英語を初めて学習する子どもたちへの発音指導がいかに重要であるかを再確認し、その対処法を早急に考える必要がある。本論においてもこのような日本人英語への矯正法をいくつか提案しているが、まだ不十分であり、今後さらに研究を深めてゆかなければならない。

序

日本人による英語の発音（以下これを「日本人英語」と呼ぶ）はお世辞にも上手いとは言えない。[1] 期待されたJETプログラム（The Japan Exchange and Teaching Program）「語学指導を行う海外青年招致事業」が発足して四半世紀になろうとしているが、発音の面での劇的効果はこれまでのところ現れていない。また、私自身のことは棚に上げて言うが、私の周りにいる大学生の英語の発音はひどいものがある。このことは教養の授業ではもちろんのこと、専門で開講されている英語音声学などの授業でも痛感させられる。英語には日本語にない母音がたくさんあるが（たとえば［æ,ə,ɔ,ʌ］など）、これらを正確に発音できる学生はほとんどいない。連続する子音の間に母音を挿入することは当たり前であり（stopを［sutoppu］と発音する）、語末の閉鎖音の前では必ずと言っていいほど促音を挿入する（hipを［hiQpu］、bookを［buQku］と発音する）。[2] 強勢（アクセント）の位置を間違えるなどは日常茶飯事である（たとえば、competitionという単語の強勢の位置を正しく理解している学生は数えるほどしかいない）。

佐賀大学　文化教育学部　欧米文化講座

本論の目的は、このような日本人英語が発生する原因を突き止め、それに対する対処法を提案することにある。なぜ日本人は英語の発音がうまくできないのか、これを改善する方法はあるのか、などがメインテーマとなる。もちろん、現在の英語教育の在り方、広く言えば現在の学校教育の在り方という制度上の問題がこの問題と密接に関係していることは否定できない。しかし、このような制度上の問題の探求は著者の興味の範囲外にあり、また、著者の能力を超えたところにあることから、本論では議論の対象としない。本論ではむしろ、日本人英語を純粋に言語学的、とくに音声学的・音韻論的観点から考察し、その原因と矯正方法を探求する。

研究の基礎となるデータについては、これを闇雲に収集し、かつそれらを列挙するという方法は採用しない。本論では、日本人英語についてのより体系的な議論を目指すことから、まずいくつかのレベルを設定し、そのレベルごとに現れる日本人英語の諸特徴を炙りだすという作業を行う。もちろん、レベル間での相互作用が問題になる場合にはそれも同時に議論する。具体的に言えば、日本人英語を下位（分節音）のレベルから上位（文）のレベルへと見てゆき、どのレベルでの誤りが一番多いか、また、レベル間での相互作用はあるのか、などを論じる。このような作業を進めながら、機会があるごとに日本人英語への対処法も提案する。

1．日本人英語とは

1.1．日本人英語の実態

本論で日本人英語と呼ぶものは日本人に頻繁に見られる発音上の間違いのことを指す。より詳細で具体的な例は次節以下に譲るが、ここでは理解を深める意味でその典型的な事例をいくつか示すことにする。

(1) a．finger – singer
b．form – foam
c．shipping, impression
d．shot, asleep
e．kick – kid
f．I know you like it.
g．There are some dogs outside.

（1a）は子音-ng の発音が問題である。singer の-ng を［ŋ］と読めず、［ng］と読んでしまい、結局 *[singər]となってしまう（* は当該の発音が正しくない発音であることを示す）。おそらく finger［finger］の発音に引きずられたものと思われる。（1b）は二重母音を長母音で発音してしまう例である。foam は［ou］という二重母音を含むが、大抵の日本人はこれを *[fo:m］というように長母音［o:］で発音してしまう。（1c）は本来英語にはないはずの促音［Q］を日本人が勝手に挿入してしまう例である。（1c）の shipping は *[ʃiQping］となり、impression は *[impureQʃon］となる（［Q］は促音「っ」を表す）。[3] 促音挿入は子音の話であるが、それに対し（1d）は不要な母音挿入の例である。shot では語末の t の後ろに［o］が挿入され *[ʃoQto］となり、asleep では s と p の後ろにそれぞれに［u］が挿入され *[asuli:pu]となる。（1e）は同じ母音/i/であっても、有声子音/d/と無声子音/k/の前とではその長さが異なることを示すための例である。ネイティブスピーカーならば間違いなく前者の母音を後者の母音よりも長く発音するが、日本人にはそれができない。（1f）は音と音のつながりを見る例であるが、多くの日本人は like it の部分を「ライク　イット」[laik it］と読み、「ライキット」[lai kit］と読むことができない。

(1g) において日本人はすべての単語を強形で発音する傾向にある。したがって、there は［ðɛər］、are は［ar］、some は［sʌm］というふうに発音する。しかしながら、音には強形と弱形があり、強勢のない音節には弱形しか現れない。したがって、(1g) の there は［ðər］、are は［ər］、some は［səm］あるいは［sm］と発音しなければならないのである。

１．２．なぜ発音指導は必要か

日本人英語の概要は上で述べたとおりであるが、ここではなぜ日本人英語が問題なのか、その理由を述べることにする。かりに日本人英語がコミュニケーションにとって何ら支障をきたすものでないのならば、個々での議論は意味のないことであるが、実際はそうなっていない。

まず考えられることは、日本人英語は聞き手に混乱を生じさせる発音であるということである。

(2)　a．The（firm/farm）is in a big（firm/farm）.
　　b．The（load/lord）wanted the servant to carry that heavy（load/lord）.

日本人は firm も farm も同じように *［fa:mu］と発音することから、(2a) を聞いた人には主語が「会社」(firm) なのか「農場」(farm) なのか判別できなくなり、これがもとで文全体の解釈が困難になる。同様のことが big の後ろの firm/farm についても言える。(2b) についても状況は同じで、load も lord も日本人は *［lo:do］と発音することから、この主語を load と解釈した人は混乱を生じてしまう。この他にも日本人は law と raw を *［lo:］に、face と faith を *［Φeisu］に、boat と vote を *［bo:to］に、year と ear を［ija:］と発音してしまうので、聞き手の側としては混乱してしまう。

日本人英語に見る誤った強勢の配置も改善を要する事柄である。(3)では強勢のある母音に ’ を付与している。

(3)　a．*de’clear, *co’mpare
　　b．*I o’bject to that proposal.

(3a) の２つの単語は両方とも動詞であるが、付与した強勢の位置が間違っている。われわれ日本人ですら本来あるべき位置に強勢がないとその語を認識するのに時間を要するのであるから、そのことにより敏感なネイティブスピーカーならなおさらである。(3b) においては o’bject と聞いた人は、これを動詞として解釈し直すのに時間がかかるであろう。

次にイントネーションについて見てみよう。

(4)　a．*Who is that doctor?↗
　　b．*Is he a doctor?↘

(4a) のように Wh-Question の語末を上げて発音する学生が最近多くなった。反復疑問でもない限りこのようなイントネーションは普通ではない。また (4b) のように最近 Yes-No Question の語末を下げる学生も多くなった。この発音だと純粋な疑問というよりも相手への確認ということになってしまう。

以上、日本人英語が聞き手に混乱を生じさせる具体例を３つ取り上げた。これらはコミュニケーションを円滑に行うための障害となるのであるから、当然改善を要することである。さらに詳細な例を次節以降

紹介するが、ただ闇雲に紹介するだけでは従来型の指摘にすぎない。本論では、日本人英語とは何であるかを少しでも体系的に論じるために、英語をいくつかのレベルに分けてレベルごとでの日本人英語というものを議論する。具体的には、まず母音と子音の分節音（segment）のレベルから始まり、次に音節（syllable）のレベルへと進み、さらに単語と句のレベルを経て、最終的に文のレベルへと進む。このような方を採用することにより、われわれ日本人が一体どのレベルで多く躓いているのかが明らかになり、それが明らかになれば、そこに対し集中的に指導なり矯正なりを行えばいいという道筋が見えてくることになる。念を押すが、このような指導は英語の初修者であればあるほど効果が上がるということを忘れてはならない。

２．分節音

２．１．母音と子音

まずは母音と子音の話をしよう。たとえば、/p/,/s/,/k/などは日本語にもあり、これらを日本人が間違って発音することはまずない。ここで問題になるのは、英語にあって日本語にない母音・子音、すなわち分節音の発音である。まずは母音と日本人英語の関係を見てみよう。

われわれ日本人が肝に銘じなければならないことは、英語の母音で日本語の母音に対応するものはないということである。この点はいくら強調してもし過ぎることはない。father や apple の綴り字 a を日本人は「ア」と発音するがこれは大きな間違いである。father の a は［a］であり、apple の a は［æ］である。なによりも問題なのは、日本語の「ア」に対応する英語の音は存在しないという認識の欠如である。綴り字の a は「ア」と発音するのだという誤った認識が日本人英語を作ってしまうのである。

日本人が日本語の「アイウエオ」を英語のどの音に対応させているか、⑸でもう少し詳しく見てみよう。

⑸ 「ア」/a,æ,ʌ,ə/　「イ」/i/　「ウ」/u/　「エ」/e,ɛ/　「オ」/ɔ,o/

注目すべきは「ア、エ、オ」において日本語対英語の対応が多対１になっている点である。日本語の「ア」を英語の/a,æ,ʌ,ə/という４つの音すべての代用形としてしまうことが問題なのである。同じことは「オ」についても言え、日本語の「オ」は/ɔ,o/の代用形とすることが間違いである。母音の発音は口腔という狭い空間の中で行われるのであるから、英語の母音と日本語の母音が類似していることは否定できないが、音声学上は全く異なる音である。したがって、「ア」を/a,æ,ʌ,ə/の４つのすべての母音に対応させることは根本的に間違っている。[4] 以上のことから、英語の母音を発音するときには日本語の母音で代用してはならないという結論が導かれる。この点は初めて英語を学ぶ学習者には特に念を押す必要がある。

日本語の母音と英語の母音が本質的に異なるということがわかったところで、次に考えるべきことは、このような英語の母音の発音をどのように学習したらよいのかということである。一般的には、先生が実際に英語を発音してみて、生徒がそれを復唱するという方法がとられているであろう。しかし、このようなやり方が不十分であるということは小学生はもとより、中学生から大学生の発音を見れば明らかなことである。つまり、単なる復唱だけでは効果は半減するということである。教師が発音の仕方を言葉で説明し、なおかつ図（口の形や舌の位置を示した図）で個々の音の作り方を教えることがあと半分の効果を生むためには重要である。とくに英語を習いたての学習者にはこの方法が有効であると思われる。発音の仕方を言葉を使って説明するということには次の２つの有利な点がある。まず、言葉を使って教えることが

できるということは、教師自身が当該の音の作り方を十分理解しているということを意味する。教師が発音の仕方を熟知していなければ、生徒に正しい発音を伝えることはできないであろう。ただ単に図を見せて、「この通りの口の形にして発音するのですよ」と言っただけでは、生徒はどこをどうすればよいかわからない。しかし現実には、発音はきれいなのに、個々の音の正確な作り方を知らない教師は案外多い。[5] 発音指導において「なんとなくわかっている」では駄目で、「はっきりわかっている」が大切である。「はっきりわかっている」ということと「言葉で説明できる」ことは同じことを指すので、教師は生徒に発音の仕方を言葉で説明する必要がある。

「言葉を使って発音の仕方を教える」ことは生徒の側から見ても有効な手段である。というのも、先生からいくら正しい英語の音を聞かされても、あるいはまた、口腔図などを見せられても、言葉による発音の仕方の説明がなければ、生徒を納得させることはできない。生徒達を納得させ、正しい発音を習得させるためには、「この音はこういうふうにして作るんだ」ということを生徒達自身が言えることが肝心である。そうすれば、初めのうちは大変であっても、そのうち苦労もなく、自然と正しい発音ができるようになるのである。

それでは実際に英語の母音をどのように言葉で教えたらよいのであろうか。一言でいえば、具体的かつ簡潔に、である。発音の指導が最も必要なのは小学生であるから、抽象的な説明や覚えきれないほど長い説明は不適切である。また、理解を助けるためにところどころに比喩表現などを用いてもよいであろう。

(6)　/iː/　唇を思い切り横に張り、かつ下あごを後ろに引く。　feel　meet
　　/i/　唇をやや横に張り、「エ」の口の形で「イ」と言う。　hill　sit
　　/a/　口を大きく開き、舌を後方に引き、喉の奥から「ア」と言う。　body　problem
　　/æ/　唇をやや横に開き、「ア」と「エ」を同時に言う。　angry　cap
　　/ʌ/　親指を縦にして前歯で軽く噛む。舌は後ろに引く。　butter　touch
　　/ə/　口を自然に少し開く。唇には力を入れない。　April　famous
　　/əː(r)/　舌先を後ろに丸め、唇と舌に力を入れる。　early　first
　　/ɔː/　カラスの鳴き声の「カー」で「オ」を言う。唇は朝顔の形。　ball　autumn
　　/uː/　唇に力を入れて、すぼめる。口笛を吹くような口の形。　group　soon
　　/u/　唇をすぼめて「ウ」と言う意識で「オ」と言う。　book　pull

(6)で示した解説法が最善の方法とは言わないが、とにかく言葉で発音の仕方を生徒に伝えることが肝心である。

母音の次は子音である。母音と違って英語の子音には日本語と共通するものがたくさんある。たとえば、/p,b,t,d,k,g,s,z,ʃ,tʃ,dʒ,m,n,l/などは英語にも日本語にも存在し、これらの音を時間をかけて練習する必要はない。しかし、以下に記した子音は日本語にないため練習の必要がある。さもないと、生徒はこれらの音を下の鉤括弧にあるように日本語の子音で代用してしまう。

(7)　/f,v/「フ、ブ」　/θ,ð/　「ス、ズ」　/ʒ/「ジ」
(7)に挙げた英語の子音の発音指導においても、(6)と同様に言葉による説明が有効である。

(8)　/f,v/　摩擦音　上の歯で下唇の内側を軽く押さえる。　full　vase
　　/θ,ð/　摩擦音　舌先を軽く噛み、外から舌先が少し見える程度にする。　think　this

/ʒ/ 摩擦音 「シュ」を有声音にする。 pleasure garage

(8)にある子音はすべて摩擦音であるが、この「摩擦」と言う点に注意を要する。なぜなら、日本人は継続音である摩擦音を破裂音のように発音する傾向があるからである。[f] の音を例にとると、日本人は上の歯で下唇を軽く噛むところまではうまく行くが、そのあといきなり呼気を吐き出すために [b] の音になってしまう。摩擦音を発音するときは息を止めて空気を破裂させるのではなく、ずっと息を出し続けなければならないということをよく理解させる必要がある。

この節では、母音と子音の発音を指導するには言葉による説明が不可欠であるということを示した。もちろん、補助教材として視覚に訴える模型や図、あるいは聴覚に訴える音声教材を併用することはより効果を上げるうえで有効であるが、しかし、なによりも教師自身が個々の音の作り方を理解し、それを言葉で表すことができなければならない。

２．２．フォニックス

2.2.1. フォニックスとは

(6)や(8)、さらにはこれらに図や音声を組み合わせて個々の音が習得できたとしても、日本人にはまだ厄介な問題が残っている。それは、発音と綴り字の関係である。英語を読んでいるときには当然文字を介して読んでいるのであるから、そこに現われている綴り字は発音のための大きな手掛かりとなるはずであった。ところが実際には、綴り字と音声が正確に１対１対応しておらず、この点が英語の学習に大きな障害となっている。この問題がとくに日本人にとって深刻なのは、日本語は英語と異なり文字とそれが表す音がほぼ完全に１対１の関係にあるからである。[6] ひらがな１文字を決まった読み方以外の別の読み方で読むことは日本語では許されない。

しかしながら、英語に関してはこの音と綴り字の１対１の対応がしばしば崩れる。すなわち、ある場合には１対多になり（9a)、別の場合には多対１になる（9b)。

(9) a．１対多 綴り字 a の読み方

cake [ei] bat [æ] father [a:] swan [a] all [ɔ] many [ɛ]

care [e] village [i] about [ə]

b．多対１ [u:] がもつ綴り字

do too two group through shoe truth blue fruit blew

(9)は数ある英語の例のほんの１例にすぎないが、これだけでもいかに日本人学習者にとって発音と綴り字の関係を習得するのが困難であるかは理解できるであろう。

このような学習者の悩みを解決する一つの試みとして考案されたのがフォニックス（Phonics）である。[7] フォニックスとは phone（音）＋ ics（学問）を組み合わせた人工語であり、綴り字と発音の関係を規則という形でまとめあげた英語の発音指導書である。以下ではそのうちのいくつかを紹介する。ここに挙げた規則は竹林（1988）からの引用である。

(10) フォニックスルール

Rule 3 -mb/-mn/-gn/-bt/-ght → [m] / [n] / [n] / [t] / [t]

bomb autumn sign doubt caught

Rule 7　ow → ［au］　frown　　au → ［ou］　launch
Rule 13　w + ar → ［wɔ:r］　war　　w + or → ［wə:r］　work
Rule 18　アクセントのない a/e/i/o/u/ou/ai → ［ə］
about　moment　April　common　album　dangerous　bargain

それぞれの規則の矢印の左側が綴り字を表し、右側が発音を表す。このような規則を学習することで、たとえば au を［au］と読みがちな日本人も正しく［ou］と読めるようになる（Rule 7 を参照）。綴り字をそのままローマ字読みしてしまう日本人にとってフォニックスは正しい発音をするための大きな助けとなる。もちろん、フォニックスの規則が多過ぎてそれらを覚えることができないとあっては本末転倒である。竹林（1988）ではその点を考慮して規則の数が20程度に抑えられている。

2.2.2. ローマ字読み

２．１節では個々の音に対する日本人英語の実態とその改善策を提案した。しかし、たとえ個々の音が正しく発音できたとしてもそれだけでは十分ではない。次には「ローマ字読み」の克服というものが立ちはだかっている。誰でもが小学校で習うローマ字読みが実はいかに英語の正しい発音にとって弊害であるか、その点を以下で論じる。もちろん本節はフォニックスを扱う節であるので、このようなローマ字読みを克服するために一体フォニックスは何をしてくれるのかについても論じるつもりである。

ローマ字読みとは綴り字と発音を１対１に対応させる読み方である。つまり、綴り字 a は「ア」と読み、t は「ト」と読む、読み方のことである。下にローマ字読みの具体例を示す。⑾において綴り字の右側に書いてある発音は日本人英語である。[8,9]

⑾　null *［nulu］　trait *［toraito］　work *［wo:ku］　most *［mo:suto］
allow *［alo:］　pilot *［pailoQto］

⑾のような例は挙げれば切がないほどにローマ字読みは日本人に蔓延している。生徒の発音でとくに気になるのが work を「ウォーク」、allow を「アロー」と読むことである。恐らくこれらの単語が初めて教科書に現れたとき教師は発音に注意するよう指示したはずであるが、多くの生徒はそれでも間違った読み、すなわちローマ字読みをしてしまう。この他にも most の o を２重母音［ou］ではなく［o］と読んだり、pilot の o を曖昧母音［ə］ではなく［o］と呼んだりすることもローマ字読みの悪い例と言える。

上で述べたような日本人英語をやめさせるためにはローマ字教育をやめればよいのであるが、ローマ字が日本人の生活に深く浸透していることを考えれば、これが簡単でないことは容易に推察できる。そこで日本人のローマ字読みを矯正するための一つの方法として近年注目されるのがフォニックスである。たとえば⑾の語に対して竹林（1988）では以下に示す⑿のようなフォニックスの規則を用いて日本人英語を矯正しようとしている。

⑿　Rule 5　u → ［ʌ］　null
Rule 6　o → ［ou］　most
Rule 7　ai → ［ei］　trait　　ow → ［au］　allow
Rule 13　wor → ［wə:r］　work
Rule 18　a → ［ə］　ago　　o → ［ə］　pilot

⑿に挙げた規則を生徒に定着させれば⑾のような誤った発音からは脱却できる。この意味でフォニックスはローマ字読みに対する有効な手段であると言える。

⑾は母音のローマ字読みであったが、もちろんローマ字読みは母音に限らない。以下のような子音にもローマ字読みは広く日本人の間で行き渡っている。

⒀ sing *[ʃiNgu]　gnaw *[guno:]　soften *[soΦutN]　runner *[laNna:]

sing という短い単語においてもローマ字読みは２つ含まれる。まず、si を「シ」（＝[ʃ]）、ng を［Ngu］と読むのがそれである。語頭の連続子音を含む gnaw は日本人には馴染みがないため、g と n の間に母音を挿入して *[guno:] となる。soften では綴り字 f が問題となる。日本人はこの f を［h］,［Φ］（[u] が後続する場合）, [ç]（[i] が後続する場合）のいずれかの音で言い換えるが、いずれにしても英語の［f］の音でないことは注意を要する。runner では綴り字 nn を文字通りローマ字読みして［Nn］を読んでしまうことが問題である。

フォニックスはこのような子音の読みに対しても有効である。以下の規則も竹林（1988）からの引用である。

⒁ Rule 1　子音字の f は規則的な発音を表す。
　Rule 3　ng → ［ŋ］　sing　gn → ［n］　gnaw

Rule 1 は要するに綴り字 f が現れたら［h, Φ ,ç］などへ変換せず、歯唇音の［f］を発音しなさいという規則である。

2.2.3. 母音挿入と子音挿入

ここでは日本人英語に見る不必要な母音と子音の挿入について論じる。日本語がモーラ言語であることは自明のことであり、そのモーラは基本的に CV（ひらがな１文字）から構成されている。つまり、日本語は子音１つに対して母音１つが後続する言語である。他方、英語はモーラ言語ではなく、したがって、英語では子音連続は当たり前に起こる。このような場合に日本人は子音の後ろに母音を挿入してしまうのである。

⒂ battle［batolu］　table［te:bulu］　express［eQkusupulesu］　strong［sutoroNgu］

express に見るように、一般に挿入される母音は［u］であるが、/t/の後ろでは［o］となる。これは本来挿入されるべき母音［u］を入れてしまうと［tu］という音になり、この音が現代の日本語にはないからである。いずれにしてもこのような母音挿入は日本語という言語に影響された現象なので、日本人がこれを矯正することは容易ではない。しかし、だからと言って、たとえば battle に余分な母音を２つ（[o] と［u]）も挿入したのでは恐らくネイティブスピーカーにはこの英語が伝わらないであろう。やはり、なんとかしてこのような発音を矯正しなければならない。もちろんフォニックスにもこのような母音挿入を阻止する規則は存在する。⒃は松香（2009）の規則である。

⑯　Rule 64「bl は b と l をくっつけて速く発音する」

ここで「速く発音する」とは母音を挿入する間もなく「速く」ということであり、この規則により table の bl の間に母音を挿入することがなくなる。

日本人英語に特徴的なことは不必要な母音挿入に限らない。不必要な子音挿入も日本人英語と言ってよい。子音挿入で問題となるのは主に促音の挿入である。

⑰　step *[suteQpu]　kick *[kiQku]　channel *[tʃaNnel]　runner *[luNna:]

促音/Q/はまぎれもなく子音であるので、⑰に見る促音化は子音挿入ということになる。channel や runner においても本来は存在しない撥音/N/を挿入するのであるから、これも 1 種の子音挿入と考えてもよい。[10] ちなみにこのような促音の挿入がいかに日本人の間に浸透しているかは、10人の生徒がいれば10人とも kick を「キック」[kiQku] と発音することからも窺える。もう一言付け加えるならば、フォニックスルールのなかに促音挿入を禁止する規則は存在しない。既存のフォニックスルールではまだ十分とは言えない一つの証拠である。

2.2.4. カタカナ表記

2.2.2.節で紹介したローマ字読みと表裏一体をなすのがカタカナ表記である。ローマ字読みは文字通り英語の綴り字を一旦ローマ字に変換して読む読み方であるが、カタカナ表記は一旦カタカナに転換して英語を読む読み方である。カタカナ表記によって英語を習いたての生徒は英語らしい発音へ一歩近づくことになる。中学生の参照する教科書ガイドにカタカナ表記が多く見られるのはこのためである。以下の例は『New Horizon 教科書ガイド』からの引用である。

⑱　Good morning, everyone.　How are you?
　　グッドモーニング　エヴリワン　ハウ　アー　ユー

発音の苦手な生徒はカタカナのほうを読めば、なんとなく英語を読んだ気持になるのである。

このようにカタカナ表記は日本人にとっては苦手な英語の発音を補ってくれるありがたい手段であるが、問題がないわけはない。たとえば、カタカナ 1 文字に対して複数の英語の音が対応する場合、カタカナ表記では対処できない。「イエス、マム」というカタカナ表記において、カタカナ「マ」に含まれる母音に対応する英語の母音は［a,æ,ʌ,ə］の 4 つあるが、一体どの母音に対応させるべきかがカタカナを見ただけではわからない。［æ］を選べば Yes, ma'am.になり、［ʌ］を選べば Yes, mom.になる。ちなみにフォニックスでは英語の綴り字を見て発音を決めるのでこのような問題は生じない。ma'am に対しては規則（19a）が正しい発音を導き、mom に対しては規則（19b）が正しい発音を導く。

⑲　a．a → ［æ］　竹林（1998）Rule 5
　　b．o → ［ʌ］　松香（2009）おまけのルール

カタカナ表記の第 2 の問題は、学習者が本来存在しない母音を単語の中に挿入してしまうことにある。たとえば「ウッド」と書いてあれば「ド」を［do］と発音するのは日本人にとって自然であるが、この

場合英語にはない［o］を付加してしまっている。カタカナ１文字が母音と子音から構成されていることを考えれば、このような母音挿入は日本人にとって避けられないことであり、それゆえカタカナ表記には細心の注意が必要である。しかし、この点に関してもフォニックスは有効であり、下の⒇のような規則を守ってさえすれば誤った母音挿入はしなくなる。この規則は竹林（1998）では最初に掲げられている規則である。

⒇ Rule 1　子音 b,d,f,h,j,k,l,m,n,p,r,s,r,t,v,w,x,y,z は規則的な発音をする。

ここで「規則的な発音する」とは要するに、各子音の後ろに余計な母音を挿入しないということを意味する。

母音の挿入だけではなく、誤った子音の挿入もカタカナ表記に内在する問題点である。「ジャケット」や「アップル」がその例であるが、ここでは不必要な促音「ッ」が挿入されている。もとより促音は子音の１種である。

最後に、カタカナ表記にはとうてい日本語とは思えない表記が多く見られるという点を指摘しておかなければならない。たとえば、『Sunshine 教科書ガイド』には since や tooth が「スィンス」、「トゥース」のように表記されているが、「スィ」や「トゥ」といった音を実際にどう発音したらよいのかよくわからない。また、『New Horizon 教科書ガイド』には Fine, thank you. を「ふぁイン　さぁンク　ユー」と書いている。ここでも「ふぁ」や「さぁ」はどのように読むのであろうか。いずれにしてもこれらが日本語にない音であることは間違いがない。他方、フォニックスの規則を学習すればこのような表記にまどわされることはなく fine や thank を正しく読めるようになる。Fine［fain］の母音は（21a）によって２重母音であることがわかり、thank の母音も（21b）によって［æ］であることがわかる。いずれに規則も竹林（1998）からの引用である。

⒇ a．Rule 6
　母音字のあとに子音字がひと続き、そのあとに e が続いて単語がおわれば、その母音字は「長音」として発音され、語末の e は発音されない。
b．Rule 4
　母音の読み方には「短音」と「長音」がある（たとえば bag は［æ］で make は［ei］である）。

（21b）単独では thank の母音が短音の［æ］であることは導けないが、（21a）を同時に考慮に入れることで［æ］が導けるようになる。

２．３．フォニックスの問題点

ここまでさまざまな日本人英語の実例とそれが生じる背景を述べてきた。さらには、その対策としてフォニックスが有効な手立てとなりうるということも論じてきた。しかし現状では、フォニックスさえ知っていれば英語の発音は完全にマスターできるというふうにはなっていない。フォニックスにも改善すべき点はあり、欠点もある。以下ではこの点についての具体的な考察を行う。

改善すべき点として最初に指摘しておかなければならないことは、フォニックスの本の中で紹介されているルールの多さである。本論で取り上げた竹林（1988）ではわずか20の規則が提案されているのみであるが、よく調べてみると実際は個々の規則がさらに小さな規則群に分かれていることがわかる。[11] 学習者

にとってそれらを一つ一つ記憶するのは大きな負担と言える。一方の松香（2009）では全体で78のルールが提示されており、これらすべてを覚えるぐらいなら、はじめから個々の単語の発音を覚えたほうがいいという気にもなってくる。

ここで述べたような生徒への負担を少しでも軽減する方法として青木（2008）はフォニックスの規則を段階的に学習することを提案した。つまり、小学校の段階では約14個の規則を、中学校の段階では約12個の規則を覚えさせるというものである。[12] 小学生には小学生向きのフォニックスルールがあってしかるべきであるし、同じことは中学生にも言える。この点で青木（2008）の提案は学習者の負担を軽減する１つの打開策と言える。

フォニックスの最大の利点は何と言っても単語の綴り字を見ただけでその単語の発音がわかるというものである。しかしだからと言って発音記号が必要なくなったわけではないということは理解しておかなければならない重要な点である。フォニックスのどの教本を見ても発音記号あるいは発音記号に準ずる記号が用いられていることはすぐにわかるであろう。つまり、いかに綴り字を頼りに発音をすると言っても、その発音の仕方は発音記号によって表わされているのであり、発音記号がなくなるわけではないのである。こうなると、学習者はフォニックスの規則と個々の発音記号の読み方を同時に学習しなければならなくなり、これはこれで大きな負担と言わざるを得ない。たとえば、松香（2008）の規則49には「n と g がくっついて［ŋ］になる」と書いてあるが、そもそもこの［ŋ］という発音記号の読み方を知らなければこの規則の意義はなくなる。このように、フォニックスにおいても発音記号の存在は欠かせないものであるが、しかし翻って考えれば、では最初からたくさんのフォニックスルールを覚えるのではなく、発音記号だけ覚えて、あとは辞書を引いた時に記載の発音記号を読めばいいのではないか、という疑問も沸いてくる。綴り字、すなわち文字だけを頼りになんとか発音できないか、というのが今後の課題であるが、現時点ではなかなかうまい方法は見つかっていない。

フォニックスの問題は個々の音の表記法だけではない。強勢（stress）に関してもまた問題である。というのも、われわれはフォニックスルールを活用する際にすでに単語のどの位置に強勢が置かれているかを知っていなければならないからである。たとえば、竹林（1988）の Rule 18 には「弱いアクセントの音節には、弱母音［ə］が現れる」と書かれている（たとえば、about の a には強勢がないので［ə］と発音しなければならない）。ここにおいてもフォニックス＝綴り字発音という単純な図式は成り立たず、学習者は事前に強勢の位置も知っておく必要があるのである。

しかしながら、フォニックスにおいて最も深刻な問題は規則に対して例外が多く存在するということである。たとえば、竹林（1988）の Rule 5 には概略次のようなことが書かれている。

(22)　o → ［a］/ ___ + 子音 #　　（# は語境界を示す）

この規則は綴り字 o の後ろに語末の子音がある場合、その o を［a］と読みなさいという規則である。この規則によって dock, drop, stop の o が正しく［a］と発音されることになるが、一方で、son, ton, won などの o までも［a］と発音されてしまう。もちろんこれら語の o は［ʌ］と発音しなければならないのであるが、これを防ぐことが(22)にはできない。

また、竹林（1988）には(23)のような規則（Rule 6）がある。

㉓＝（21a）母音 → 長母音 / ____ ＋ 子音 ＋ e #

この規則を用いればたとえば make, tale, fate などの a が正しく長母音［ei］と発音できるようになるが、その一方で give, have, come, love, some, live などの第１母音も長母音にしてしまう。注意すべきは、give や have といった㉓の例外となる語が決して英語にとって周辺的な単語ではなく、むしろ学習すべき重要な基本語彙であるという点である。これらの基本語彙の発音を正しく与えることができない規則㉓は問題があると言っていいであろう。

フォニックスルールに用いられる表現にも問題がある。フォニックスルールはそのほとんどの規則が「～は～のように発音する」という形で表現されているが、教育の効果を考える時、むしろ「～は～のように発音してはならない」という形で表現したほうがいい場合が多くある。たとえば、kick に対して日本人は「キック」と発音するのであるが、このような促音挿入を防止する規則がフォニックスには存在しない（⒄を参照）。恐らくこのことはフォニックスルールに「～してはならない」という否定の表現形が使われていないことと無関係ではないであろう。かりに「英語を発音するときには促音を挿入してはならない」といった否定表現の使用が許されるのなら、もっと多くの日本人英語を矯正することが可能であったろうと思われる。規則の表現の仕方にもさらに改良すべき点がある。

最後に帯気音とフォニックスについて簡単に触れておこう。帯気とは強勢が置かれた母音の前の破裂音［p,t,k］によく見られる現象で、これらの子音を発音するときに肺からの空気が一旦喉の奥で圧縮され、発音するときにその圧縮された空気を一気に爆発させる現象を言う。帯気音（あるいは帯気子音）はたとえば pen［p^hen］や tennis［t^henis］の最初の子音に現れる。[13] 問題は日本人がこの帯気音をほとんど発することができないという事実である。もちろんこれは日本語に帯気という現象がほとんど見られないことに起因するが、たとえそうであっても帯気のない英語は実に英語らしくない。しかし、この帯気という現象をフォニックスでは一切扱わない。英語らしい英語にどこまで近づくことができるか、フォニックスルールの守備範囲はどこまで伸ばせばよいのか、この点を考えるのに帯気音の扱いは今後大いに議論されるべき論点となるであろう。

３．音節

次に音節と日本人英語の関係について論じる。われわれにとって音節という言葉は聞き慣れたものであっても、実際のところどこに音節の切れ目があるのかを言い当てるのは難しい。その原因は突き詰めれば、日本語が音節言語ではなくモーラ言語であるということになるであろう。つまり、日本語ではモーラが語を構成する基本単位であり、したがって和歌や俳句を作る時指折り数えているのは実はモーラの数である。モーラは CV（C は子音、V は母音を表わす）を基本形とし、音節はモーラよりもレベルが１つ高い。言い換えれば、音節は（C）（C）（C）V（V）（C）（C）モーラを内包する（（　）の中の要素の出現は随意的である）。したがって、英語の strict は音節で言えば１音節であるが、日本語に書き直したときには「ストリクト」のように５モーラとなる。単語のなかの音節の数はその単語に含まれる母音の数とほぼ等しい。「ぽぽ」と言ったのは little の語末にある-l のように子音でありながら音節を形成する成節子音が英語には存在するからである。

音節の概略は今述べたとおりであるが、問題は音節の切れ目である。これがわかっていないと、単語をどこで切って読めばいいかがわからないし、英語の強勢位置の予測もつかない。[14] たとえば、indeed, artist, city の３つの単語はいずれも母音が２つ含まれていることから２音節語であることは間違いないが、それぞれの語の音節の切れ目がどこにあるかということになると日本人の間で意見が分かれる。下に

音節の可能な切れ目を示す（ピリオドは可能な音節の切れ目を表す）。

⑵④	indeed	(a)	i.ndeed	(b)	in.deed	(c)	ind.eed
	artist	(a)	a.rtist	(b)	ar.tist	(c)	art.ist
	city	(a)	ci.ty	(b)	cit.y		

city のように可能性が２つしかない場合においても日本人の間でどちらが正しい音節の切れ目か判断に困る。これが indeed, artist のように３つの可能性を持てばなおさらである。

そこで役立つのが音節化規則（Syllabification Rule）である。

⑵⑤　音節化規則

a．問題となる子音連結が頭子音連結として許されなければ、許されるところで音節の切れ目を入れる。（Kahn（1976）参照）

b．母音で始まる音節よりも子音で始まる音節を好む。（Ito（1989）参照）

たとえば（24a）の indeed を取り上げると、ここで問題となるのは nd という子音連結である。この子音連結は英語の頭子音連結には見られないかたちなので（すなわち nd で始まる語はない）、（25a）の適用によって n と d の間に音節の切れ目を置くことになる。artist についても同様の理由で r と t の間に音節の切れ目が来ることがわかる。一方 city には連結子音がないので（25a）は適用されず、その代わりに（25b）が適用されて ci.ty となる（cit.y であると第２音節が母音で始まることになり、（25b）に違反することになる）。音節という概念は英語の発音を理解するうえで欠かせない概念であることから、⑵⑤の規則をできるだけ早い時期に教えることが大切である。

音節の切れ目に関して１つ注意しておかなければならないことがある。それは、ネイティブスピーカーの直観としての音節の切れ目と一般の辞書に記載の音節の切れ目と必ずしも一致しないということである。たとえば、『ジーニアス英和辞典』では easy, dancer, college に対して eas.y, danc. er, col. lege のような音節表記をしている（ピリオッドは音節の切れ目を指す）。辞書には辞書の書記法があり、一概にこのような表記を間違いとは言えないが、発音上はもちろん ea. sy, dan.cer, co. lleg が正しい。

英語の一つの特徴として、一定の条件さえ整えば（たとえば同じ頭子音、同じ母音であることなど）、音節の長さは一定に保たれるというものがある（窪園・本間（2002）参照）。たとえば see, seed, seat という１音節語は頭子音も母音も同じなので発音するときほぼ同じ時間をかけて発音される。しかし、掛った時間は同じでも、その中身は違うということは知っておくべきであろう。具体的には、語末が有声子音である場合と無声子音である場合を比較すると、前者の前に位置する母音のほうが後者の前に位置する母音よりも長く発音されるのである。すなわち、seed の［i:］のほうが seat の［i:］よりも長く発音されるということである。これは、無声子音は有声子音よりも本来的に長く発音されるという英語の特徴とも関係しており、seed と seat にかかる時間が同じであるとするならば、当然前者の母音のほうが後者の母音よりも短く発音されるという計算になる。今言ったことを図示すると以下のようになる。

(26) see |---|----------|
s i:
seed |---|----------|---|
s i: d
seat |---|--------|-----|
s i: t

(26)に示した事実は、英語の発音が上達するための必須事項ではないが、しかし、よりネイティブに近い発音を習得しようとする学習者には見逃せない事実である。

4．単語

音節がいくつか組み合わさると単語ができあがる。本節ではこの単語のレベルで観察される日本人英語について論じる。ただし、このレベルで指摘すべき点は意外に少なく、以下で述べる強勢に関するものがほとんどである。

１音節語は必然的にその中の母音に強勢が与えられるが、２音節語以上になるとどの音節に強勢を置いたらよいかが問題となる。強勢というものをもたない日本人にはこれが実に厄介なことである。それゆえ、日本人は強勢の位置をよく間違える。果たして以下の単語の強勢位置を正しく言える大学生がどれほどいるであろうか。

(27) competitive assure indifference individual accommodation electricity

強勢に関してはChomsky and Halle（1968）から現在に至るまで様々な理論が提示されてきた。しかし、このような理論を時間を掛けて日本の生徒に教えることは有益だとは思われない。[15] したがって、教師はこのような単語が出てくるたびに正しい強勢の位置を確認する必要がある。個々の音（子音と母音）を間違えて発音すると単語の意味がネイティブに伝わらないように、強勢の位置を間違えても単語の意味が伝わらない。assureのような短い単語であっても第１音節に強勢を置くと多くのネイティブが首を傾げることは必定である。

しかしながら、強勢の位置を云々するよりは強勢を一切置かないで発音する、いわゆる平板調の英語のほうがより深刻な問題である。[16] このような平板調は日本語がストレスアクセント言語ではなくピッチアクセント言語であることからの影響である。いずれにしても、平板調で発音された英語はネイティブスピーカーにとっては聞きづらい発音であることは間違いない。したがって、生徒が単語などを平板調で発音した場合には、すかさず強弱のメリハリをつけて読むよう指導する必要がある。

最後に多少瑣末な事であるが、教室でよく耳にする語末の-ateの誤った読み方について触れる。-ateは動詞の末尾に来た場合はそのまま［eit］と発音してもよいが、名詞あるいは形容詞の末尾に来た場合は［eit］ではなく［ət］と発音しなければならない。

(28) 動詞 -ate#:［eit］ demonstrate dedicate regulate
名詞・形容詞 -ate#: ［ət］ appropriate separate Senate

ここでは語末のateを［ət］と発音することがあるということはもちろん、品詞によって同じ単語・接辞

の発音が変わることもあるということを同時に教える必要がある。発音が品詞に依存するということは強勢の位置に顕著に現われ、たとえば、permit を「許可する」という動詞の意味で言おうとすれば第２音節に強勢を置かなければならないし、「許可」という名詞の意味で言おうとすれば第１音節に強勢を置かなければならない。これはいわゆる「名前動後」（名詞は前に強勢があり、動詞は後ろに強勢がある）の１つの例であるが、品詞によって音形が変わる１つの例でもある。

５．句

５.１．リズム

語と語が繋がると句になる。句で問題になるのはやはり強勢である。ただし、語のレベルの強勢を一般には語強勢と言うが、句のレベルの強勢はリズム強勢あるいは単にリズムと呼ばれる。日本人にとってこのリズムを習得することは大変難しい。

リズムの定義の仕方は様々であろうが、ここでは最も単純でオーソドックスな「強弱の繰り返し」としておく。ここで「強」と呼ぶものは強勢が置かれている音節のことで、「弱」と呼ばれるものはそれが置かれていな音節のことである。このようにリズムと強勢は密接に関係しているこ。どの音節が強（s）で、どの音節が弱（w）であるかは、あらかじめ決まっている。

(29)　s：名詞、動詞、形容詞、副詞、疑問詞のなかの強勢のある音節
　　w：上記以外の品詞（be 動詞、助動詞、接続詞、代名詞、冠詞など）と、上記の語の中の強勢のない音節

(29)で挙げた s と w の繰り返しがリズムであるが、このリズムが英語の語順に影響を与えているということはあまり教育の現場で教えられない。ネイティブスピーカーにとってリズムを保つことは重要なことであり、時にはリズムを優先するあまり文法さえも破壊しまうことがある。また、リズムと言えば英語の詩歌のことをまず頭に浮かべるであろうが、日常の言葉においてもリズムは頻繁に表れる。(31)では［　］のなかのリズムが問題となっている。

(30)　a．time and money　　bread and butter　　Tom and Jerry
　　s　w　　s　w　　s　　w　s　w　　s　w　s　w
　　b．money and time　　butter and bread　　Jerry and Tom
　　s　w w　s　　s　w w　　s　　s w w　s
(31)　a．It was［a dull and lengthy］speech.
　　w　s　w　s　w　　s
　　b．It was［a lengthy and dull］speech.
　　w　s　w w　　s

(30a)，(31a）が正しい英語の語順であり、(30b)，(31b）が正しくない英語の語順である。リズムは強と弱の規則的な繰り返しであることはすでに述べたが、「強弱」の型の繰り返し（30a）だけがリズム的なわけではない。「弱強」の繰り返しである（31a）もリズム的と言えるし。これに対し、(30b, 31b）は対応する（30a, 31a）の単語を単純に入れ替えただけであるが、リズムは壊れてしまっている。すなわち、swsw であったものが swws へと入れ替わったのである。Tom and Jerry を Jerry and Tom と言わないの

はこれが漫画のタイトルとして定着しているからではなく、リズムが整わないからである。このようにリズムは英語を理解し、発音するうえで必要不可欠な事項であるので、これを学習者に教えることは十分意義のあることである。

５．２．リズム衝突の回避

上ではリズムの大切さを述べたが、別の言い方をすれば、英語という言語はリズムを整えるために努力を惜しまない言語ということである。極端に言えば、リズムを整えるためには既存の文法構造（あるいは文法の決まり）さえも壊してしまうことがあるということである。具体的な例を見てみよう。

(32) a．a quite job → quite a job
　　w s s　　s w s
　b．a half hour → half an hour
　　w s s　　s w s
　c．He make her go. → She［was made go］. → She ［was made to go］.
　　w s s　　w s w s

(32a, b）は不定冠詞（(29b）により自動的に w と見なされる）＋形容詞（(29a）により s と見なされる）＋名詞（(29a）により s となる）の連鎖であり、矢印の左側に２つの s が連続している（以下これを強勢の衝突あるいは単に衝突と呼ぶ)。英語ではこのような衝突を回避するために矢印の右側のように語順を sws に変える操作を行う。注意すべきは、この語順、すなわち冠詞＋名詞＋形容詞という語順は通常では許されない語順であるということである。このことはいかにネイティブスピーカーにとってリズムが大切であるかということを表す１つの証拠と言える。[17]（32c）は１番左の文を受動態にしたものであるが、通常 make は使役動詞であるので、この make を受け身にしても後続する動詞は原形不定詞のままであるはずが、実際は go の前に不定詞 to が付随してくる。このような文法破壊も実は強勢の衝突（真ん中の文の下線部）を回避するためのもの、言い換えれば、リズムを整えるものという観点から見ればそれほど不自然な操作とも言えなくなる。

強勢の衝突は(32)のような特殊な場合に限らない。むしろこの現象は日常にあふれていると言える。

(33) Japanese women → Japanese women
　s w S S w　　S w s S w
　　thirteen books → thirteen books
　　s S S　　S s S

(33)においてスモール s は第２強勢の位置、ラージ S は第１強勢の位置を表わす。下線はラージ S が連続している部分であり、句における強勢衝突の箇所である。このような衝突を回避するために、左側にあるラージ S がさらに左へ移動する。少しスピードの速いネイティブの発音によく見かける現象である。強勢の衝突をわれわれ日本人が意識的に回避することはむずかしいであろう。しかし、真に英語を究めようとするならばこのような現象も心得ておかなければならないであろう。

６．文

最後に文にまつわる日本人英語を取り上げる。コミュニケーションはもちろん文発することで成り立つが、発音の指導ということになるとどうしても文より下のレベル（すなわち、母音・子音、語や句）に目が行ってしまう。もちろんこれらのレベルの発音を学習することは基本であるが、コミュニケーション能力の発展にはやはり文の正しい発音が必要である。以下ではそのような文にまつわるさまざまな日本人英語を取り上げ、その指導法を探る。

６．１．等時間隔性

日本語がモーラ言語であることはすでに述べた。モーラ言語は一つひとつのモーラを同じ長さで発音するという特徴をもっている。しかし、このような日本語の特徴を英語に応用すると問題が生じる。日本人はすべての音節を同じ時間を掛けて発音してしまうのはその一つの現われである。さらに困ったことに、抑揚を一切付けないで発音するのである。個々の音節が同じ長さで発せられ、なおかつ抑揚がないとなると、ネイティブスピーカーにはまさに「お経」か何かを読んでいるとしか思えないであろう。

抑揚は後述するとして、ここでは英語の発音が音節から次の音節までの等時間隔性（それぞれの音節が同じ時間で発音されること）ではなく強勢から次の強勢までの等時間隔性で成り立っていることを示す。⑶④のｓとｗは⑵⑨によって与えられたものである。

⑶④　a．What a nice and happy time we had!

```
s w   s   w      s   w s       w   s
|--|     |--|      |--|     | - - |      |--|
```

b．What a beautiful good time we had!

```
s w   s    ww   s    s       w s
|--|    | -   - |  |--|    | -    -| |--|
```

⑶④に表示されている |--| は、それらがすべてほぼ同じ時間の長さで発音されることを示している。ｓは強くゆっくり、ｗは弱く早く発音することはもちろんであるが、（34b）のように出だしの２音節から成る what a と次の３音節から成る beautiful、さらにはその次の１音節からなる good や had がすべて同じ長さの時間で発せられるというのは日本人に馴染みがないかもしれない。したがって、このような等時間隔をいきなり生徒に教えることは得策でないかもしれないが、英語の上達には必要なことである。小学生や中学生には等時間隔性以前に、「強勢のある場所は強く長く読み、強勢のないところは弱く短く読む」という基本的な発音方法をまず習得させるべきであろう。

等時間隔性そのものを理解することが困難なうえに、等時間隔性に伴う統語構造と音韻構造のミスマッチがさらに学習者を悩ます。（34b）がその例である。ここでは等時間隔性によって time we がひとつの音韻的まとまりをなすが、統語的に見れば time と we がまとまりを成すことはない。

６．２．強形 vs. 弱形

単語を単独で発音するときにはそれほど問題ではないが、その単語を文の中に入れて発音するとなると日本人英語が突如現れてくる。ここで言う日本人英語というのは、弱形を使いこなすことのできない英語のことをいう。逆に言えば、文中の単語をすべて強形で発音することが日本人英語ということになる。以下で話題にするのは単語の読み方であるので本来なら第４節で扱うところであるが、文中における単語の

読み方ということなので本節で扱うことにした。

さて、強形と弱形とはいかなるものであるのか、以下でその具体例を示そう。なお、ここで示した強形と弱形は手持ちの学習辞典には必ず記載されているのでぜひ参考にしてもらいたい。

(35)

		強形	弱形		強形	弱形
代名詞	me	[miː]	[mi]	you	[juː]	[ju]
	he	[hiː]	[hi]	she	[ʃiː]	[ʃi]
	us	[ʌs]	[əs]	them	[ðem]	[ðəm]
助動詞	was	[wæz]	[wəz]	had	[hæd]	[həd]
	do	[duː]	[du] [də]	can	[kæn]	[kən]
	would	[wud]	[wəd]	should	[ʃud]	[ʃəd]
前置詞	of	[ʌv]	[əv]	to	[tuː]	[tə]
冠詞	the	[ðʌ]	[ðə]	that	[ðæt]	[ðət]
	an	[æn]	[ən]	some	[sæm]	[səm]

この表からわかるように、弱形に現れる母音は［ə］また、は［i］である（対応する強形の母音が［iː］である場合のみ［i］が現れる）。日本人は一般に単語を強形で発するが、それだと強弱のリズムが生まれなくなり、英語らしくない発音になってしまう。[18] われわれは、すでに(29)でどの単語を強形で発音し、どの単語を弱形で発音すべきかについて見てきた。問題は日本人が弱形であるはずの単語を弱形として発音できないことである。(36)は実際の文を用いて弱形がどのように現われるのかを示したものである。

(36) Most of the time he was trying to probe he hadn't gone out of the room.
[əv][ðə] [hi][wəz] [tə] [hi] [hədnt] [əut][əv] [ðə]

強形と弱形について学ぶことは日本人英語からの脱却を目指す発音指導において重要な点であるので、繰り返し注意を喚起する必要がある。

6.3. 音のつながり

音の強弱と並んで「音のつながり」も英語らしい特徴である。この特徴は語末が子音で次の語の語頭が母音である時に見ることができる。なぜ C#V（# は語境界）において子音と母音がつながるかについては、「音節は子音で始めるべきである」という音韻上の一般原理が働いていると思われる。実はこの原理についてはすでに（25b）（「母音で始まる音節よりも子音で始まる音節を好む」）で論じた。以下に音のつながりを示す具体例を見てみよう。

(37) a. Look‿at him.
b. The boss‿is‿on vacation.
c. Clean‿up the mess!

（37a）の at［ət］は母音で始まっていることから（25b）によって前の語の末尾子音［k］が［ə］と結び付く。その結果、Look at him. は Loo kat him. のように発音されることになる。（37b, c）についても

(37a) と同じことが言える。このような音のつながりはある程度速いスピードで発話した場合に起こると思われがちであるが、実は話すスピードを遅くしても変わらない。音のつながりは英語らしい発音の典型であるが、著者の経験上日本人学生の半数から３分の２がこのような発音に慣れていない。たとえば教科書を読むような場合にももっと積極的にここで見たような音のつながりを教えてゆく必要があるであろう。[19]

６．４．文強勢

語強勢が単語の中の強勢であるのに対して、文強勢は文の中の強勢である。とくに文中の複数個ある強勢のなかで一番強い強勢を指して文強勢と言うことが多い。そしてその文強勢は文の焦点と密接な関係にある。焦点とはわかりやすく言えば話者が聞き手に最も伝えたいことであり、最も伝えたいことだからこそ最も強い強勢（文強勢）が置かれるのである。

では焦点はどこに置かれるのであろうか。それに対する答えは実は「どこにでも」ということになる。具体例を見てみよう。(38)の John teaches physics には右側の疑問文に応じて３通りの焦点が考えられる。(38)では焦点部分を大文字で表記している。

(38) John teaches physics.

a．JOHN teaches physics.	cf. Who teaches physics?
b．John TEACHES physics.	cf. Does John teach physics or study it?
c．John teaches PHYSICS.	cf. Which subject does John teach, physics or math?

(38a) では右にある疑問文の答えとして John に焦点が置かれている。しかし、このような疑問文がなくても話者の頭の中で John を強調したいという願望がある場合は、やはり (a) のような発音になる。いずれにしても日本人には焦点の与えられた語を他の語よりも強く読むという習慣があまりないので、文強勢の指導法としては、焦点を今以上に強く読むよう指導する必要がある。

文強勢は句あるいは文の中の最も右側の構成素にのみ与えられるということは知っておかなければならない知識である。

(39) [S John is [VP reading [NP a book [PP about poems]]]]

a．What kind of book is John reading?

b．What is John doing?

c．What is that voice?

(39a) の疑問文に対しては PP の [about poems] が焦点となるが、文強勢はその中の最も右側の構成素 poems だけに与えられる。また、(39b) の疑問が発せられた場合、焦点となるのは VP の [reading [a book [about poems]]] であるが、文強勢はここでも最も右側の poems にのみ与えられる。さらに、(39c) の疑問文に対する焦点は S 全体、すなわち [John is [reading [a book [about poems]]]] であるが、やはりここでも文強勢は poems にのみ付与されることになる。ここで述べた知識は英語の初学者には少し難しいかもしれないが、少なくとも英語の教師は知っておかなければならない知識であろう。[20]

６.５．イントネーション

文の発音指導に欠かせないのがイントネーション（抑揚）である。イントネーションは文の意味と密接に関係しており、その種類も細かく分類すると数えきれないほどあるので（逆から言えば、それほどに微妙に意味の違いをイントネーションの違いで表しうるということになる）、学習者にとってはなかなか厄介な代物である。しかしそうは言っても基本的なイントネーションの型というものは存在することから、それらをまず身につけさせることは必要である。

(40)

イントネーション	意味		
下降調	断定	She ↘ could do.	「できますよ。」
上昇調	疑問	She ↗ could do?	「できますか。」
下降上昇調	躊躇	She ↘↗ could do?	「できることはできるんですが。」
		It's very ↘↗ fast.	「速いことは速いんですが。」
上昇下降調	反論・驚き	She ↗↘ could do.	「できないことはないですよ。」
		On ↗↘ Monday.	「え、月曜日？本当ですか。」

下降調と上昇調が何を意味するかについては容易に推測できるが、下降上昇調と上昇下降調は馴染みがないであろう。しかし、両方とも映画やテレビ番組ではよく耳にするイントネーションであり、もちろん教科書のなかでも使われているイントネーションである。抑揚と意味が密接に関係していること、また、平板調になりがちな日本人の発音をメリハリのある発音に矯正することなどを考えると、(40)に挙げた４つのパターンを練習することは意義のあることである。

７．結語

本論は日本人に特有な英語の発音（これを日本人英語と呼んだ）を言語のレベルごとに論じ、その原因の究明と矯正法について提案した。また全体の議論を通して、最下位の「分節」と最上位の「文」において日本人英語が最も顕著に現れることもわかった。したがって、学校教育の現場ではとくにこれら２つのレベルでの発音教育が重要であるということになる。著者は過去２年間教員免許状更新講習会を（題目「英語の発音指導」）開く機会を与えられた。幸いにも出席された英語の先生方からは、「有意義な講習会であった」という言葉をいただいたが、同時に多くの先生方から「これからは今以上に真剣に発音指導をやってゆきます」という決意の言葉もいただいた。これは裏返せば、現在の英語教育では発音の指導に十分な時間を掛けていない、あるいは掛けられないということであり、英語の発音指導にとっては決して好ましくはないことである。著者はコミュニケーション・イングリッシュを標榜する現在においてこそ発音の指導は必須のことであると考える。今後この分野での成果が待たれる。

注

1．「日本人英語」と言えば、日本人特有の発音の仕方はもちろんのこと、日本語文法に影響された英文解釈や英作文、さらには日本文化に深く根差した英語を話すときの態度など、さまざまな事柄を連想させる。しかし、本論では日本人による英語の発音をとくに「日本人英語」と呼ぶことにする。

2．ここで/Q/は促音を表す。

3．shipping の正しい発音は［ʃipiŋ］であるが、ここでは単語全体の日本人読みを示しているため、［ʃiQping］のように記述している。

4．(5)には載せていないが、［iː］や［uː］などの長母音も「イー」や「ウー」とは異なる。

5．実際、中学校・高等学校の英語の先生を対象とした教員免許状更新講習会（題名「英語の発音指導」）において、各先生の英語の発音は申し分ないのに、「母音や子音の発音の仕方を言葉で説明してください」という質問には答えられない先生が多くいた。

6．「ほぼ完全」であって「完全」と言えないのは、たとえば撥音の「ん」は先行する子音によって具現化する音が異なる、といった事実があるからである。具体的には、「さんにん」（３人）の「ん」は［n］、「さんぼん」（３本）の「ん」は［m］、「さんかん」（３巻）の「ん」は［ŋ］と発音される。

7．本論は日本人英語の特徴とその改善方法の提示を目標としているので、フォニックス開発の歴史やフォニックス研究の進展には立ち入らない。本論で紹介する２冊の本（竹林（1988）、松香（2009））は著者が任意に選別したものであり、フォニックスのすべてがこの２冊のなかに書かれているわけではない。

8．*［　］は予想される日本人英語である。日本人は英語の/r/を［l］で発音する傾向にあるので/r/は自動的に［l］に変換している。

9．⑾の［　］の中には英語にはない母音が含まれている。このような不必要な母音挿入については節を改めて論じる。

10. 本論では小野（2011）にならって、/Q/と/N/の挿入を促音化と呼ぶ。小野（2011）では撥音を促音の変種と見なす提案がなされている。⒄が促音化例であるとしたのはこのような考えに沿ったものである。

11. たとえば、Rule 3 は実際には２つの規則からなっている。

Rule 3 次の子音は発音されない。

１．語頭の kn-の k, gn-の g, wr-の w。

２．語末の-mb の b,　-mn の n,　-gn の g,　-bt の b,　-ght の gh。

しかし、よく見るとそれぞれの規則もまたいくつかの規則から成っている（例えば、語頭の kn → k, gn → g, wr → w のように３つの規則から成っている）ことがわかる。

12. 青木が提示した規則がどのようなものであるかは青木（2008）を参照。

13. ただし、s の後の破裂音は帯気しない。したがって、skin, step, speak の［k, t, p］は帯気音ではない。

14. 強勢（stress）と日本人英語については次節で詳しく見るが、ここでは音節と強勢の関係について簡単に述べる。英語には弱音節（CV）と強音節（CVV, CVC）の２種類の音節があると言われ、名詞ならば語尾から２番目の音節が強音節の場合その音節に強勢が置かれ（agenda, consensus, synopsis など）、その音節が弱音節ならば強勢は１つ前にずれて語尾から３番目の音節に置かれる（America, cinema, asterisk など）（Chomsky and Halle 1968参照）。言うまでもなく、どの音節が強音節であり、どの音節が弱音節であるかは音節の切れ目がどこにあるかを知らなければ決定できないことであり、その意味で音節の切れ目を正しく理解することは強勢の位置を知るうえでとても重要である。

15. 最新の強勢理論として Yamada（2010）を挙げることができる。Yamada は独自の関数理論を構築し、個々の関数が相互に影響し合って強勢の位置を割り出すと提案した。しかし、もちろんこのような複雑な理論を生徒に教えるわけにはゆかない。

16. 強弱を付けずに平板調で発音する仕方は、「ダ、ダ、ダ」のように聞こえることから機関銃発音と呼ばれたり、モールス信号発音と呼ばれたりする。

17. もちろんすべての冠詞＋形容詞＋名詞の語順が形容詞＋冠詞＋名詞の語順になるわけではない。このことは a sweet memory が sweet a memory に決してならないことからもわかる。したがって、㉜に挙げている例はあくまで特殊な例と言えるが、本論が注目しているのはその特殊性ではなく、リズムを整えるためにわざわざ語順を入れかれることがあるという点である。

18. 正確には、日本人は［ʌ］や［æ］と言った母音を正しく発音できないので強形も発していないということになる。

19. 実は教室で使う CD あるいはカセットテープの音声はすべてここで示したような音のつながりをもって発音されている。しかし、それにもかかわらず大部分の生徒が語末の子音と語頭の母音を結びつけて発音できないというのは、日本語の影響もさることながら、教師の指導が徹底しないことも一つの要因ではないかと思われる。

20. 本論で述べたように一般には文強勢は構成素の右端にある要素に置かれるが、そうならない場合もある。たとえば、“Is John reading a book of poems?” “No, he is reading an article ABOUT poems.” という会話において、最初の話者が「詩が書いてある本（＝詩集）」と言ったのに対して、２番目の話者がそれを否定し「詩について論じた本」と答えているような場合である。ここで焦点となる構成素は［about poems］であるが、文強勢は about に置かれるのである。

参考文献

音声学関連

Cipollone, Nick, Steven H. Keiser and Shravan Vasishth（1998）*Language Files*. 7th ed. Ohio State University Press.
深沢俊昭（2000）『英語の発音パーフェクト学習事典』アルク.
川越いつえ（2007）『英語の音声を科学する』大修館書店.
窪薗晴夫（1999）『現代言語学入門２　日本語音声学』岩波書店.
窪薗晴夫・本間　猛（2002）『音節とモーラ』研究社.
Ladefoged, Peter（2006）*A Course in Phonetics*. 5th ed. Thomson Wadsworth.
McCully, Chris（2009）*The Sound Structure of English: An Introduction*. Cambridge University Press.
Otaka, Hiromi（2009）*Phonetics and Phonology of Moras, Feet, and Geminate Consonants in Japanese*, University Press of America.
島岡　丘（1986）『教室の音声学』研究社.
竹林　滋（1996）『英語音声学』研究社.
田中伸一（2005）『アクセントとリズム』研究社.
鳥居次好・兼子尚道（1962）『英語の発音指導―研究と指導―』大修館書店.
鳥居次好・兼子尚道（1969）『英語の発音指導』大修館書店.
安井　泉（1992）『音声学』開拓社.
鷲見由里（2000）『英語の発音が正しくなる本』ナツメ社.

フォニックス関連

青木美菜子（2009）「フォニックスの実践的研究」佐賀大学文化教育学部卒業論文.
Carney, Edward（1997）*English Spelling*. Routledge.
A. W. ハイルマン・松香洋子（1981）『フォニックス　指導の実際』玉川大学出版.
松香洋子（2008）『フォニックスってなんですか？』松香フォニックス研究所.
竹林　滋（1988）『英語のフォニックス　改訂版』The Japan Times.
山崎紀美子（1998）『スペリングと発音のしくみがわかる本』研究社.